

原口典之 1946-2020

原口典之氏(1946~2020年)がご逝去されました。重要な日本人アーティストである原口氏はポスト・ミニマリズム的な解釈を通し文化、環境と強い関連性を持つ絵画と彫刻作品を発表し、1960年代後半から世界的評価を集め始めました。

ロンドン・テート・モダンよりフランシズ・モリス氏とイ・スクキョン氏のステイトメント

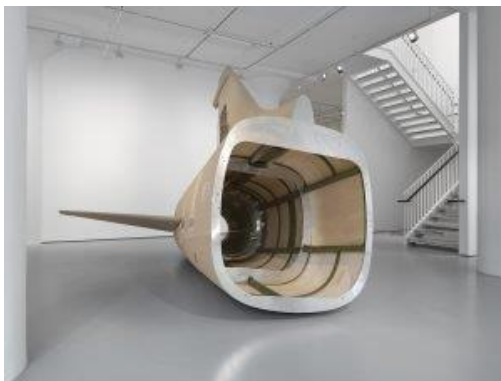
「原口典之氏は1977年のドクメンタ6にて日本人アーティストとして初めて展示を行うという歴史的な功績を残されました。記憶に鮮明に残る液体の表面が反射する、スケールの大きな作品である《Oil Pool》は、モダニズムへの言及を探るような、ありのままの素材と製造された物質の間に存在する複雑な対話、工業化と自然の間の対話を、人々を魅了する形式的な美しさによって体現していました。彼は横須賀で生まれ育ち、アメリカ海軍基地で戦闘機を目にした幼少期の記憶は素材に対する興味、客観性と知覚の問題意識へとつながり、それは「もの派」運動における重要な立ち位置をしめることとなります。1970年東京ビエンナーレに共に参加した同世代の日本、ヨーロッパ、アメリカの作家たちの作品とともに、原口氏の《Airpipe C》(1969年)はテート・モダンに長期展示されています。」



Photo by Shigeo Anzai

「原口氏はテートにとっても寛大に接してくれました。静かで控えめな、けれど暖かく心遣いのあるアーティストとして、テートはいつまでも彼を忘れることはありません。」

1946年に生まれ、生涯のほとんどを故郷であり、またアメリカ海軍第7艦隊の母港である横須賀で過ごした。大工業地帯である川崎市の南に位置する横須賀の環境は、原口の美学と純粋な構造に対する直感を形作っていった。



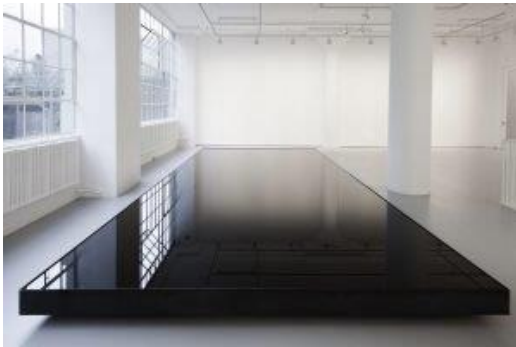
Installation image of 'A-7E Corsair II' in Noriyuki Haraguchi at Fergus McCaffrey, New York, 2015

ベトナム戦争と米軍の日本領土内駐在に反対するデモ、学生運動の真っ只中であった1960年代後半に日本大学に進学。1968年アメリカ海軍戦闘機の後尾部を目にしたことは、原口の政治的要素を孕むミニマリスト的な美学を確立する決定的な経験となった。この経験から原口は彼の代表作品である、ベトナム戦争時代に使われたアメリカ戦闘機の実物大レプリカ作品シリーズ最初の作品で、1968年から69年に制作された《A-4E Skyhawk》を生み出す。この作品は、《Ship》シリーズ(1963年~65年)、《Tsumu 147 (Freight Car)》(1966年)、《Air Pipe》シリーズ(1968~69年)などの初期の絵画、彫刻作品と並び、原口のミリタリズムと重厚な工業性の美学に対する鋭い認識の始まりを表す作品であり、この関心はその後数十年のキャリアを通して続くこととなる。

1970年大学を卒業してすぐの1971年、溶接された鋼と黒く鼻を突くような匂いのする、使用済のマシン・オイルを使って《Oil Pool》を制作。瞑想的で優美な反射と毒性の強い物質の

間に起こる摩擦を強調するこの作品は、後に別バリエーションが制作され、1977年のドクメンタ6で大きな評価を受け、その後テヘラン現代美術館（イラン）のコレクションとなる。同美術館では今も《Oil Pool》が展示されている。

ファーガス・マカフリーは次の言葉をおくっている。「この文章を書きながら、狂気と言っていいほどに野心的なアートを追い求める中で散らかり放題になってしまった、逗子の原口さんの家にいた時の事を思い出している。狭い部屋、むせるようなタバコの煙、狂気じみた隣人たち、毒性のポリウレタンの煙。そして長谷川等伯と富士山について思いを巡らせる原口さん。今頃、富士山を包む淡く白い光と雲の中で、二人は一緒になっているだろう。そして彼もまた、未来の世代のクリエイティブな魂たちにとって、重要な作品を生み出していく大きなインスピレーションになっていくことを確信している。」



Installation image of 'Oil Pool' in Noriyuki Haraguchi at Fergus McCaffrey, New York, 2015

原口の作品は国内外で広く紹介されてきた。近年の個展・グループ展：Fergus McCaffrey（ニューヨーク、2015年、2014年、2012年）、MIYAKE FINE ART（東京、2014年、2012年、2010年）、金沢美術工芸大学ギャラリー（2013年）、Art Unlimited 2014, Fergus McCaffrey（2013年）、ソウル大学美術館（2013年）、エスパス・ルイ・ヴィトン（東京、2012年）、鎌倉画廊（2012年）、ニューヨーク近代美術館（2012年）、横須賀美術館（2011年）、BankART（横浜、2009年）、ハンブルク美術館（2007年）、レンバツハハウス市立美術館（ミュンヘン、2001年）

1969年（東京国立近代美術館）、1973年（東京セントラル美術館）文部大臣賞受賞。

原口典之の人生とキャリアをふり返って：

「1977年のドクメンタ6。部屋に入ると空間が本来よりも重たく、暗く感じられた。分からない何かによってその部屋は濃密になり、静まりかえっていた。何か霧のようなもの、自ずと発生した触れることさえできそうな「黒さ」に押し込まれるような感覚を持った。一辺が約7m、もう一辺が約3.5mの鋼の矩形の隅々まで、30cmほどの深さで錆色の油が満たされ、ほとんど部屋を占領していた。人1人ぎりぎり通れるだけ床が露わになり、油のプールがその狭い道に囲まれ、固定され、護られているのを見た。

— そして、その部屋が世界になったのを感じた。

「それまで美術というものに圧倒された経験は一度もなかった。ただ空っぽにさせられるか、ほとんど破壊されたと感じたことしかなかった。しかし、その瞬間、私は確かに圧倒させられていた。人生が変わるのを感じた。

一体どうやって原口はこんなことを成し遂げたのだろうか？『ただ彼がいた場所から始め、そして辿り着くところに辿り着いたという事によって。』これ以外の答えを私はその時見つけることができず、今も見つけられずにいる。そこに回答などはない。私たちが食い尽くしてしまうほど力強い芸術が存在すること、そしてそれに導いてくれる偉大なアーティストが存在することを祝福するのみである。」

— リチャード・ノナス

1988年（山梨県・白州）、水田と森に囲まれた田園風景の中に、原口は鉄のプールを作り始めた。水田は人類が古くから発見した水平の見本だ。その水平を鉄の枠で見事に原口は作り上げた。物質が一滴も外部に漏れないようにして。大自然の中に巨大な原口作品の仕掛けが整った。

僕が原口と出会って14年、原口の個性にまだ深く踏み込んではいなかった。空（から）の鉄枠は僕の不安とそして関係者の思惑を無視して、そこにあった。しかし、ついに物質が大きな水平を保ち、枠の内に満たされた。それはオイルではなく「水」だった。一夜あけた原口作品には、水生昆虫、空飛ぶ昆虫たち、大自然が、集合した。

原口典之のオイルプールは世界中に点在する。が、水を貼った作品は2度と作ってはいない。人がどう思うのか知らないが、僕はこの原口作品の深いそして柔らかい個性を愛している。

合掌

—田中泯

「悲報を受け、残念でなりません。神のご加護を心よりお祈りします。彼はいつまでも私たちと共にあり、そして作品を通して私たちは彼のことをいつまでも思い続けることでしょう。」

—テヘラン現代美術館（イラン）